

## 嚏の俗信を巡って

——日本中国の「嚏」の比較——

丹羽博之

### 要旨

『詩經』(終風)の「寤言不寐、願言則嚏」の詩句に対して、鄭玄箋には「今俗人嚏、則曰人道我、此古之遺語也」とある。古代中国では、嚏をすると他人が自分のことを言っているという俗信があったことを示している。その俗信は後世にも受け継がれていった。

北宋蘇軾の「元日過丹陽明日立春寄魯元翰」詩に、

白髮蒼顏誰肯記 白髮蒼顏 誰か肯へて記せん

暁來頻嚏為何人 暁來頻りに嚏す 何人の為ぞ

とあるほか、

『嬾真子』卷三「俗説以人嚏噴為人説、此蓋古語也」(俗説人の嚏噴を以て、人説ふと為す。此れ蓋し古語也)

等の例を見る。

嚏の俗信を巡って

一方、日本でも、嚏をするときは誰かが噂をしているという俗信がある。用例を挙げると、

艶二郎くしゃみをするたび、世間でおれが噂をするだろうとおもへども

黄表紙・江戸生艶氣樺焼(1785)

夏をよそに噂をすればか此ゆふべ薄夏といふてだれもはなひける(三馬)

滑稽本・大千世界楽屋探(1817)下

日比のうさを語合、誇り咄しに洩右衛門、定めて嚏のうさからんと、思ひやるさへおかしき

人情本・明鳥後正夢(1821~24)二・十二回

等、江戸時代にまで遡れる。これらの江戸時代の俗信と中国の俗信との関係を考察する。

一方、嚏は種々の俗信がある。「嚏を一つすれば褒められ、二つすれば憎まれ、三つすれば惚れられ、四つすれば風邪をひく」等とも言う。

『万葉集』には、

うち鼻ひ鼻をそひつる〔鼻乎曾嚏鶴〕剣太刀身に添ふ妹し思ひけらしも

卷十一・二六三七番歌

の歌が収められているが、これは、前掲の嚏の俗信の「三つすれば惚れられ」に対応する。

この他『徒然草』(四七)にも「くさめ」のまじないの話がある。『詩経』の嚏の俗信を中心に日本中国の嚏の迷信について考察した。

キーワード：嚏、俗信、詩経、万葉集、蘇軾

一、噓は噂されているからの俗信

I 中国の例

『詩経』(邶風・終風)の「寤言不寐、願言則噓」の詩句に対して、鄭玄箋には「今俗人噓、則曰人道我、此古之遺語也(今俗人噓、則ち人我を道ふ、此れ古の遺語也)」とある。古代中国では、噓をすると他人が自分のことを言っているという俗信があったことを示している。その俗信は後世にも受け継がれていった。以下にその例を挙げる。

A 『詩経』(邶風・終風)

終風且暴 終風且つ暴とし

顧我則笑 我を顧みて則ち笑ふ

諠浪笑敖 諠浪笑敖きやくろうせうがう

中心是悼 中心是れ悼む

終風且霾 終風且つ霾つちふ

惠然肯来 惠然として肯て来る

莫往莫来 往くと莫く来ると莫く

悠悠我思 悠悠として我れ思ふ

終風且噓 終風且つ噓くもる

噓の俗信を巡って

不日有噎 日ならずして有噎またる

寤言不寐 寤めて言ことばに寐いねられず

願言則噎 願おもふて言ことばに則すち噎ていす

噎噎其陰 噎えい噎えいとして其れ陰いんり

虺虺其雷 虺き虺きとして其れ雷らいす

寤言不寐 寤めて言ことばに寐いねられず

願言則懷 願おもふて言ことばに則すち懷わいふ

(本文・訓読は高田信治 漢詩大系『詩経』集英社)

この詩の「願言則噎」の詩句について、鄭玄箋には「今俗人噎、則曰人道我、此古之遺語也」とあり、『新字源』の噎の項目にも例として挙げる。

この噎の俗信は已に一六世紀には日本で語られている。

『毛詩抄』【嘉祿四(一五三一)年から天文四(一五三五)の講義の筆録という。】には、

終風且噎 不日有噎 寤言不寐 願言則噎

終に風かぜふいて且また噎えいす 日ひあらずして有また噎えいす 寤さめて言ことば寐いねられず 願ねがはくは言ことば噎えいづかん

(略)

鄭玄はみかへたぞ。州吁が此かなしい事を、せめて思だされたらば、いまこゝで鼻をもひうず物を、世俗に云と同ぞ。鼻ひるをうしろ事をすると云ぞ。あちらが思出て云はば、鼻をもひうずものをぞ。

〔毛詩抄〕 講述者 清原宣賢 校訂者 倉石武四郎・小川環樹 岩波書店

とあり、清原宣賢の生きた一六世紀には「他人が自分のことを言くと嚏をする」ということが『詩経』（終風）の鄭玄箋によって日本でも知られていた。

以下に嚏の俗信の例を挙げる。

B 北宋蘇軾の「元日過丹陽明日立春寄魯元翰」詩に、

堆盤紅縷細茵陳 盤うづたかに堆たかくして 紅縷茵陳細し

巧與椒花兩鬪新 巧みに椒花せうわと兩ふたつながら新たかを鬪たたかはず

竹馬異時寧信老 竹馬異時寧なんぞ老を信まぜんや

土牛明日莫辞春 土牛明日 春を辞する莫なかれ

西湖弄水猶応早 西湖に水を弄するは 猶ほ応に早かるべし

北寺觀燈欲及辰 北寺に燈を觀る辰に及ばんと欲す

白髮蒼顏誰肯記 白髮蒼顏 誰か肯まへて記せん

曉來頻嚏為何人 曉來頻りに嚏す 何人の為ぞ

〔蘇東坡全詩集〕 卷十一 久保天隨・釈清潭・岩垂憲徳訳注 日本図書

とあるほか、

C 『嬾真子』 卷三 「俗説以人嚏噴為人説、此蓋古語也」（俗説人の嚏噴を以て、人説ふと為す。此れ蓋し古語也）

等の例を見る。この他、錢鍾書著『宋詩選注1』（宋代詩文研究会訳注 東洋文庫 一三四頁～一四八頁）の梅堯臣の解説において、嚏の俗説の例が挙げられている（立命館大学名誉教授寛文先生御教示）。また、『笑府』（二七二）くさめ（噴嚏）岩波文庫）にも。以上の例から、中国では嚏をするのは他人が自分のことを言っているときにでるものとされていた。それ以外の嚏の俗信もあるかもしれないが、現在調査中。

## II 日本の例

一方、日本でも、嚏をするときは誰かが噂をしているという俗信がある。江戸時代の例を挙げると

艶二郎くしゃみをするたび、世間でおれが噂をするだろうとおもへども

黄表紙・江戸生艶気樺焼（二七八五）

夏をよそに噂をすればか此ゆふべ薄夏といふてだれもはなひける（三馬）

日比のうさを語合、謗り咄しに測石衛門、定めて嚏のうるさからんと、思ひやるさへおかしき

滝亭鯉丈・為永春水合作 人情本・明鳥後正夢（一八二二～二四）二・十二回

等が有る他、川柳には、石川一郎『江戸文学俗信辞典』（東京堂出版 一九八九）には、

老尼のくさめは比叡のうわさ也（『徒然草』）

風をひく時も噂とひげをなで

くしゃみして帰て嫁をねめ廻し

等が挙げてある。この嚏の俗信は江戸時代を遡ることができず、このころに流行した『詩経』の影響があつたか（小林一茶が『詩経』の詩句から俳諧を詠んだことは有名）。

## 二、日本の嚏の俗信

日本には、上代より嚏について種々の俗信がある。『故事俗信ことわざ大辞典 第二版』（北村孝一 小学館 二〇一二年）には、

嚏を一つすれば褒められ、二つすれば憎まれ、三つすれば惚れられ、四つすれば風邪をひく

〈俗〉くしゃみの出る原因を述べたことは、他にも「嚏した時、一つ惚れられ、二つ憎まれ、三つ噂さる」など種々にいう（俚  
諺俗信聞書帖（一九三三）一（佐渡））\* 譬喩尽（二七八六）四「嚏の名目一褒、二譏、三笑、四風引」\* 国字分類諺語（幕  
末頃）、「一ほめられ、二そしられ、三ほれられて、四風ひく」（略）

とある。なお、「嚏」は『倭名抄』には、「嚏 波奈比流、噴鼻也」とあり、『新撰字鏡』には、「噴嚏 波奈比流」とある。

## I 上代の嚏の俗信

上代の嚏の例を挙げる。

『万葉集』（新編 日本古典文学全集）には、

うち鼻ひ鼻をそひつる〔鼻乎曾嚏鶴〕 剣太刀身に添ふ妹し思ひけらしも

作者未詳 卷十一・二六三七番歌

とあり、『時代別国語大辞典 上代編』には、以下のようにある。

はなふ「鼻鳴」(動上二)くしやみをする。「つぎねふ山城川に蜻蛉鼻アキツふく波奈布はなふとも我が愛し者に逢はずは止まじ」(琴歌譜)「眉マヨ根搔ネき鼻火はなひ紐解け待てりやも何時かも見むと恋ひ来し吾を」(万二八〇八)「眉根搔ネき鼻鳴はなひ紐解け待つらむか何時かも見むと思へる吾を」(二四〇八)

【考】例歌その他多くの歌から、眉のかゆいこと・下紐のとけることなどとともに、くしやみをするのは、人に恋される、または恋人が訪ねてくることの前兆とされていたことがわかる。(以下略)

この他の例を挙げると、

問答

「眉根搔マヨネき鼻火はなひ紐解け待てりやも何時かも見むと恋ひ来し吾を」(万二八〇八)

右、上に柿本人麻呂が歌の中に見えたり。ただし、問答なるを以ての故に、ここに重ねて載せたり。

今日なれば鼻の鼻ハひし眉かゆみ思ひしことは君にしありけり(万二八〇九)

右二首

の歌が収められているが、これらは、前掲の嚏の俗信の「三つすれば惚れられ」に対応する。『時代別国語大辞典 上代編』の「考」が指摘するように、上代においては、相手に恋しく思われているときに嚏はでるとされていた。

## II 平安中世の嚏の俗信

時代が下ると、嚏の俗信も変化する。以下、探し得た嚏の俗信の代表例を挙げる。

A 『古今集』 卷十九・一〇四三・よみびとしらず（小沢正夫・松田成穂『古今和歌集』新編日本古典文学全集）

出でて行かむ人をとどめむよしなきにとなりの方にははなもひぬかな

同書の注には、

「鼻をひる」は、くしゃみをすることで、悪いことの前兆で出発を見合わせることなどの俗信があった。

とある。

B 『枕草子』 一七七段「したり顔なるもの」（萩谷朴『枕草子』新潮日本古典集成）

したりがほなるもの。正月ついたちに最初にはなひたる人。よろしきひとはさしもなし。下臈よ。

同書の注には、

元日に最初にくしゃみをした者が得意になるというわけは、くしゃみをした時に「休息万命急々如律令」と唱えて、まず無病息災延命長寿のまじないの一番乗りができるからであろう。清少納言のいうように、いかにも無学下賤の者が喜びそうなたわいなことである。

とある。その他の例を挙げると、

C 『枕草子』二五段(渡辺実『枕草子』新日本古典文学大系)

鼻ひて誦文する。おほかた、人の家の男主ならでは、たかく鼻ひたる、いとにくし。

同書の注には、

くしゃみをして。くしゃみは縁起のよくないものとされ、呪文をとなえて縁起をなおす習慣があった。

とある。

D 『枕草子』一七七段(渡辺実『枕草子』新日本古典文学大系)

物など仰せられて、「我をば思ふや」ととはせ給。御いらへに、「いかがかは」と啓するにあはせて、台盤所のかたに、鼻をいとたかうひたれば、「あな、こころ憂。そらことをいふなりけり。よしよし」とて奥へ入らせ給ひぬ。いかでそらことにはあらん、よろしうだに思ひきこえさすべきことかは、あさましう、鼻こそそらごとはしけれ、と思ふ。さても、たれかかくにくきわざはしつらむ、おほかた心づきなし、とおほゆれば、さるおりもをしひしぎつ、あるものを、まいていみじ、にくしとおもへど、まだうゐうゐしければ、ともかくもえ啓しかへさで、あけぬれば下りたるすなはち、(以下略)

同書の注には、

くしゃみ（＝鼻をひる）が、嘘や冗談の印とされていたことがわかる。  
とある。

E 『簾中抄』

はなひたる折の誦、休息万命、急急如律令、くさめなどいふは是にや

F 『拾芥抄』上

休息万命、急急如律令、噓と云ふは是なり

G 『徒然草』四十七段

或人、清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめくさめ」と言ひもて行きければ、「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、答へもせず、なほ意ひやまさりけるを、度々問はれて、うち腹たちて、「やや、鼻ひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡山に兎におはしますが、ただ今もや鼻ひ給はんと思へば、かく申すぞかし」と言ひけり。有り難き志なりけんかし。

H 『古事類苑』〔神代余波下〕

正月元日朝噓すれば、傍より常万歳といふことあり、みづからは糞食へといふ人あり、（略）

等がある。噓をしたときは不吉なことの前兆としてまじないをするというのが共通点であろう。この他、嘘をつくとき鼻をひるといふ迷信

噓の俗信を巡って

もあつた。このように、時代が下ると、嚏は上代の「恋しい人に思われているときに出る」という俗信から変化した。

本発表直前に、『万葉集(四)』(岩波文庫 二〇一四年八月十九日)が出版された。その「解説4」で、大谷雅夫氏は、前掲の『詩経』(終風)の鄭箋の嚏の例と『万葉集』(二六三七)の例を挙げて、

その鄭箋の解釈による『詩経』の句が、「万葉」の「うち鼻ひ鼻をそひつる」という表現を生んだのであろうか。または偶然の一致か。それはただちに結論の得られない難問となるであろう。(以下略)

と述べられた。たしかに、この嚏の日中の俗信の関係は早急に結論を得がたく、今後考察したい。

大谷氏は、

「嚏して云く、人、我を道ふらし」という俗信は、後の中国文学にはほとんど現れない。

と述べられたが、前掲『宋詩選注1』等に挙げたように、「嚏」の俗信は、後の中国の文学にも受け継がれている。

#### まとめ

日本においては、嚏の俗信は、時代によって変化した。

- ① 上代では、嚏は恋人が自分を思う時に出る。
- ② 平安中世では、嚏をしたときは不吉なことの前兆で、まじないをする。嘘をついたときにもでる。

③ 噓をするのは、誰かが噂しているから出るという俗信は、近世から見え、現代に至るまで存在する。これらのことを勘案すると、他人が噂をしたときに噓が出るという俗信は、江戸時代に中国の『詩経』鄭玄箋などによって広まった可能性がある。足利学校では十八世紀に『詩経』が講じられており、小林一茶には、『詩経』に基づく句があること等、『詩経』は庶民に至るまで広く読まれていた。

## 補記

大谷雅夫氏が述べる如く、『詩経』の俗信と『万葉集』の噓との関係は難しい。『万葉集』に見られる「噓」の俗信は、山上憶良等の漢詩文の強い影響を受けた歌人ではなく、作者未詳の歌が多く、日本独自の俗信と考えられる。「噓」をすると他人（誰だか不明）から噂されているという俗信と『万葉集』に見える特定の人に思われているというのでは対象が異なる。眉のかゆいこと・下の紐が解けることと同じ日本古来の俗信かと考えるほうが良いのではないか。

ただし、時代は下るが、明の馮夢龍撰の笑話集『笑府』（二七二）くさめ（噴噓）・（岩波文庫・松枝茂夫訳）には、

田舎者、城内から帰ってきて女房に向かい、

「おれ、城内まちにいるとき、何度もつづけさまにくさめが出たよ。どうしてだろう」

というと、女房、

「それはわたしが家うちでお前さんのことを思っていたからさ」という。またの日、その男が糞をかついで丸木橋を渡っているとき、

また、何度もつづけさまにくさめが出て、すんでに足をすべらして落ちようとしたので、

「助平女め、おれのことを思うにしても、場所柄を考えてすりゃいいのに」  
とぼやいた。

とあり、女房が夫のことを思ったので、夫がくさめをしたという話で、『万葉集』の俗信と類似する。前掲『宋詩選注Ⅰ』の梅堯臣の詩では、夫の思いにより、妻がくさめをする詩であった。万葉のころに中国にもこうした俗信があり、日本に伝来したのかもしれない。しかし、

・『詩経』の難解な原義や鄭箋を万葉人は知っていたか。

等の理由から、万葉の例は日本独自の俗信の可能性が高いのではないか。

中国にもこの他、俗信辞典などを調べると日本とよく似た例もあるかもしれない。朝鮮半島でも噓は他人が噂するから出るとい俗信があると聞いている。西欧や世界では噓はどう捉えられているのか、今後調査したい。

\* 『笑府』の例については、NHK文化センター京都教室の「漢詩の鑑賞」受講生中村幹夫氏からご教示を得た。

\*\* 本稿は、和漢比較文学会 第七回特別例会(台湾大学・二〇一四年八月二十六日)において口頭発表したものに加筆修正したものである。席上、有益なご助言を頂きました。記して御礼申し上げます。